『べらぼう』時代のお座敷を盛り上げた人々
男芸者、幇間、声色師の研究…?!

あいも変わらず『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』（NHK大河ドラマ）絡みの話題でご辛抱いただきます。ここ数回、宴席の盛り上がりが良いメリハリをもたらしていて嬉しや嬉しやでございます。三味線を弾く芸者さん、幇間（太鼓もち）の姿もちょい出ましたな。欲を申せば、まだ寛政の御時世ぢゃないんですから、もっと芸の場面を増やしてもばちは当たりません。

『べらぼう』贔屓の善男善女の皆様におかれましては先刻ご承知の「吉原細見」には、花魁の名前とは別に、「男藝者之部」ですとか「女げい志やの部」（女芸者の部）なる欄もありまして、名前が載っています。お節介ながら、芸者というと女性と決めてかかっちゃいけません。女芸者イコール花魁でも有馬温泉です。唄や三味線や踊りなどの芸でお座敷に貢献するのが仕事の人のことを芸者と当時は呼びました。男芸者イコール陰間（男娼）ではないこともご存知でしょうな？ぢゃ男芸者は何する人かですって？

それでは、天明四年（1786）出版の蔦屋重三郎版『吉原細見五葉松』（図）をご覧くだされ。

「男藝者之部」に書いてあるのは主に音楽関係者の名前です。浄瑠璃の太夫や三味線弾きの苗字、つまり河東節の十寸見姓、山彦姓、常磐津節、富本節、義太夫節の竹本姓、さらに長唄系の荻江節の人と思しき荻江姓のほか、能役者を思わせる「こんぱる」まであります。上段の右から八人目の「富本・豊喜太夫」は、字面からすると、以前ドラマに描かれた富本節（浄瑠璃）の若きスター富本・豊前太夫かと思いそうになるかもしれませんが別人です。浮世絵の「青楼仁和嘉盡」シリーズの中に富本豊喜太夫の名前が出てきますから、富本は誤記でしょう。仁和嘉というのは、吉原遊郭で毎年八月一日から行われた祭礼行事の俄狂言などの演し物のことです。

二段目右端の「荻江藤兵衛」の名は浮世絵「青楼仁和嘉 女芸者之部 浜音頭里の賑」にも見られますし、山東京伝の大ヒット黄表紙「江戸生艶気樺焼」にも出てきます。めりやす（しんみりした短い唄）が上手かったようです。その時代、荻江節の主要な活動場所はお座敷でしたが仁和嘉でも大活躍したのでしょう。

二段目中程の長門万里は幇間で黄表紙も著しました。

羽振りのいいお客が宴席を張る時には幇間が付き物だったそうですが、ちょちょら（口先だけのお世辞＝よいしょ＝、ごまかし）だけでなく、当時どんな芸で座を盛り上げたのか知りたいのが人の常でございましょうな。

二段目中程に見える大坂屋五丁は、常磐津節「年増」に登場する五丁と同一人物としたら声色師（物真似師）に違いありません。ただ、この曲で五丁は、芸者上がりの年増（当時は二十歳から二十五歳未満あたりまでを年増と呼びました。ちなみに二十五で中年増、三十で大年増、と使い分けがちゃんとありました）の「私も元は深川に流れの道もくみ分けた芸者勤めの気苦労を、いくつ重ねて山開き」云々の辛気喋りを長々と聞かされる一方で、芸を披露してくれません。声色（物真似）も幇間の重要な芸の一つだったと存じますが、声色師イコール幇間とは限りません。

大坂屋五丁の左隣の大薩摩目吉は山東京伝の「明年七変目景清」に絵入りで登場します。江戸浄瑠璃の大薩摩の太夫として歌舞伎に出勤した後、吉原の男芸者となり、七変目（目かずらをかけ変えて種々の表情を見せながらの噺芸）で人気を博したと伝わります。

二段目左から三人目の三味子利八は幇間であることが山東京伝の洒落本「娼妓絹麓」から窺い知れます。

従来、幇間は吉原の廓外に居住していましたが、安永七年（1778）二十人の幇間が廓内に入って名主の支配に属して鑑札を受けるようになりました。その一人に一飄なる者がおります。奈蒔野馬乎人の黄表紙「啌多雁取帳」にその名が出てきます。明和～安永期に人気がありました。「啌多雁取帳」には安永～天明期に浅草界隈の見世物に出て人気者だった物真似師、鶴市（松川鶴市）が、「鶴市も裸足で逃げ巻（揚巻）の介六（助六）、あんけら門平（わんぺら門兵衛）と、歌舞伎の登場人物になぞらえた地口で引っ張り出されています。歌舞伎役者も感心するほど声色、身振りの模写が巧みだったと、瀬川如皐（歌舞伎狂言作家）の「只今御笑草」に紹介されています。

この作物は江戸の大道芸の重要文献でありまして三十数種の大道芸人が紹介されています。恋川春町が「参幅対紫曽我」で引き合いに出した芥子之介、どじょう太夫の二人も含まれます。芥子之介は朋誠堂喜三二も「天道大福帳」で引き合いに出すくらいで評判の曲芸・手品・軽業師、どじょう太夫は浮世物真似・落とし噺・洒落・地口で大笑いをとった話芸家でした。この芸人たちもお座敷に呼ばれたのでしょうな。

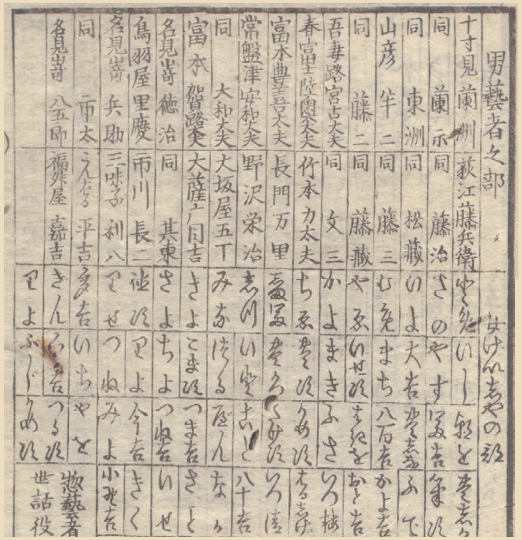
恋川春町の出世作「金々先生栄花夢」では幇間の万八が、主人公の金むらや金兵衛にたかって、ちょちょら攻めします。「だんなのお姿、どうもいえませぬ。すごい、ひょうびょう」てな調子。遊郭で金兵衛がお金をまくと、「これはきびしい（素晴らしい）。とんと梅ヶ枝もどき。ありがありが（ありがたや）」と拾います。浄瑠璃『ひらがな盛衰記』の遊女梅が枝にたとえているところからすると万八も歌舞伎通ですかな。「ありがありが」「おそろおそろ（おそれいりました）」などと畳語が癖なのは幇間ゆえかもしれません。

先ほど挙げた「青楼仁和嘉盡」シリーズは音楽人だけでなく、幇間たちお座敷盛り上げ役の重要な資料集でもあります。「江戸町二丁目 男藝者どうけにわか」では男たちが歌舞伎や踊りを演じている様子が描かれていて名前も出ています。「くわいらいし（傀儡師）平治、からこ（唐子）嘉吉・栄治郎、山ねこ（山猫）久ぞう、よしつね（義経）きとう、べんけい（弁慶）哥治、せんどう（船頭）利八、とも盛（知盛）万里、口上河六」。利八も万里も上図の男藝者之部にもある幇間（三味子利八、長門万里）に相違ないかと。

男芸者に関しては、立派な研究報告がございます。『「吉原細見」に見られる男芸者一覧（稿）：研究代表者 前原恵美（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所）』です。そこには音楽資料として「吉原細見」を読み、なおかつ三味線音楽の情勢を検討した成果が記されていますが、幇間、声色師は深掘りされておりません。

吉原細見には上図の如く「女げい志やの部」（女芸者の部）も載っています。「青楼仁和嘉盡」にも「女藝者之部」があり、三味線を手にする女性や踊ったり演じたりしている女性の姿が描かれ、八十吉、いつ清、秀松、おちゑ、おの吉、おいよ、おひで他色々な名前も出ています。八十吉は上図にも載っていますな。こうした女げい志やの芸の内訳を知りたいものですが、まとまった文献はございましょうかな？

（＊＝『古典邦楽十吋盤のすすめ』＝より）



「吉原細見五葉松」男藝者之部、女げい志やの部：天明４年（1786）蔦屋重三郎版：国書データベースより（江戸東京博物館所蔵）

清元「傀儡師」を入れたビクターの十吋LP（清元志寿太夫、他）（＊）

常磐津「年増」を入れたコロムビアの十吋LP（常磐津三東勢太夫、他）（＊）